

先崎千尋の

オピニオン

「中国では日本人といじめられ、日本へ帰ったら中国人といじめられ、私の国はどこなの?」。5月29日に土浦市民会館で「嗚呼 満蒙開拓団」が上映されたが、終わってから映画の冒頭に登場する池田澄江さんら2人の元残留孤児が舞台から切々と訴えた。

をしっかりと受け止めていく構成。作者自身の目と耳と足を駆使して現地の風土を、一歩ずつ確かめていく展開は、口当たりの良い歴史解釈が束になってもかなわない、百聞に勝る発見に満ちている」というのが受賞の理由だ。

嗚呼 満蒙開拓団

この映画は、中国大連に生まれ、戦後岩波映画で記録映画の演出、脚本に携わった羽田澄江さんが撮った作品。2009年度文化庁文化記録映画大賞などを受賞している。「数十年も故郷に帰れなかった満蒙開拓団民の人々の思い

映画は07年1月30日、東京地方裁判所の場面から。元残留孤児たちが起こした国家賠償訴訟裁判の判決が出た日だ。結果は原告の敗訴。悲鳴に近いどよめきが広がり、怒りと悔しさで泣き崩れる女性たち。しかし、このことが解決しなければ戦後は終わらな

い。映画はこの場面を追っそこから始まる。満蒙開拓団とは1931年の満州事変後、日本政府の国策によって中国東北部に入植させられた日本移民のこと。朝鮮を植民地にし、なお資源と土地を持たない日本は活路を満州に求めた。昭和の大恐慌は農村にも激しく襲いかかり、女子の身売りもあちこちにあった。「ここにいてもろくに食うものもない。満州へ

自分で生きていこうとした。しかしその土地は、もともとそこに住んでいた中国人から取り上げた土地。そういう事情は一切知らされず、ただひたすらお国と家族のために彼らは満州へ渡って行って、働いた。

この映画は、開拓団がなぜ送られたか、どんな悲劇をたどったか。今まで知らされてこなかった歴史の事実が元孤児たちの証言と現地取材の

記録によって克明に描かれている。悲劇は敗戦間際の8月9日にソ連が日本に宣戦を布告し、北部満州に進撃してきたことから始まる。ソ連国境近くに多く置かれた開拓団は、表面きは開拓であっても国のねらいは安上がりの軍隊、「人間トーチカ」だった。ぎりぎりの時に渡満し、ソ連軍が入ってきた時に荷物が届いた家族。逃げまどうさなか、苦渋の選択で子どもを置いてきた母親。その場に歩けなくなつた祖母を置き去りにした人。

開拓団の人たちが頼みにしていた満州軍はその時はすでに南へ撤退し、ソ連の南下を防ぐために江河にかかる橋まで破壊したという。開拓団を見捨てた、見殺しにしたのだ。映画のなかの証言にもあるが、開拓団の人が役人や軍の関係者を乗せたトラックや汽車に手をかけると、その手を振り払って去って行った、という。

この場面を見ていて、1999年に東海村で起きたJCOによる臨界事故の時の村上達也村長のせりふを思い出した。JCOの社員とのやりとりで、JCOはすでに社員を避難させていると聞いた村長は「それじゃあ、関東軍みたいだな」と言った。歴史的事実を知らなければ、とっさにこのせりふは出てこない。

中国と日本、戦争は民衆に何をもちたらずのかを考へるために、特に若い世代に人たちにこの映画を勧める。この映画は7月7日に水戸市の県民文化センターで上映される。



茨城大学地域総合
研究所客員研究員

先崎 千尋さん

【略歴】1942年那珂市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。農協職員、瓜連町長、ひたちなか農協代表理事専務などを経て現在、特定非営利活動法人有機農業推進協会理事長、茨城大学地域総合研究所客員研究員。著書に『農協に明日はあるか』『ほしいも百年百話』など。